

『源氏物語』における「橋の小島」の位置について

— 宇治川の水面の描写から —

加藤伸江

はじめに

『源氏物語』の浮舟巻にみえる「橋の小島」とは、どこなのか。「橋の小島」は、匂宮が浮舟を連れて舟に乗り、しばし停まり、歌を詠んだ場所である。宇治橋から眺める宇治川は、流れが速く、水量が多いように見える。この川の流れの中、舟を停めて、匂宮と浮舟が優雅に歌を詠むことができるだろうか。現在の宇治川の流れは、「橋の小島」付近の『源氏物語』本文の水面の描写と合わないように思われる。では、物語の舞台として適当な場所はどこだろうか。当時の読者は、どんな場所を想定して物語を読んでいたのだろうか。『源氏物語』本文に即した場所を提示すべく、考察する。

一、先行研究における「橋の小島」の位置

まず、『源氏物語』における「橋の小島」の先行研究をみる。

古注釈では『河海抄』¹⁾に、「皇子尊宇治王也の在所也」とある。菟道稚郎子皇子の墓とされている場所は、宇治橋下流にある。『湖月抄』²⁾には、箕形如庵の説として、「橋の小嶋は、宇橋より一町ばかり川下に在り川中嶋也。今は流れて其あとなし云云。」とある。

日本古典文学大系『源氏物語』³⁾は、「宇治橋の下流にある小島」としている。『源氏物語評釈』⁴⁾は、位置について「どこか不明」としている。日本古典文学全集『源氏物語』⁵⁾には、「今日では宇治川の下流約二〇〇メートルの中州を称するが、その位置については古來說が多い。」としている。新潮日本古典集成『源氏物語』⁶⁾は、「地形変り、今不明。」としている。新日本古典文学大系『源氏物語』⁷⁾は、位置についての注記はない。テキストとしている新編日本古典文学

全集『源氏物語』⁸⁾は、日本古典文学全集『源氏物語』と同じ注記が掲載されている。

このように、古注釈には宇治橋より下流であったことが注記され、各先行注釈書においては、宇治橋より下流である、または不明であるという注記が掲載されていた。

しかし、「橋の小島」についての論考には、異なる説がある。増田繁夫氏「源氏物語地理考」、原田敦子氏「浮舟入水と橋の小島」、所京子氏「橋の小島の崎」の再検討¹¹⁾である。増田繁夫氏は、「橋の小島」の近くに八宮の家があり、その上流の方に橋の小島があって、夕霧の別荘は八宮の家の向ふ岸のあたりにあった」とされている。原田敦子氏は、「宇治川の両岸に対置された八の宮の山荘と源氏の別荘、橋の小島はその中間に存在する川中島」とされており、所京子氏は、「現在の恵心院から興聖寺琴坂下までの間の河岸あたり」の出洲であるとされている。

従来、『京都源氏物語地図』¹²⁾に示されるように、夕霧の別荘が現在の平等院の地点にあったとし、宇治八の宮山荘は、その対岸にあったと考えられている。「橋の小島」の位置を、増田繁夫氏は、平等院より上流だと考えられている。原田敦子氏は、平等院とその対岸にある中島だとされている。所京子氏は、宇治橋上流の位置を示し、出洲であるとされている。「橋の小島」に関する増田繁夫氏・原田敦子氏・所京子氏の論考は、古注釈や日本古典文学大系『源氏物語』

などの先行注釈書とは、異なる場所が挙げられているのである。

二、他文献による位置の想定

古注釈および日本古典文学大系『源氏物語』などの先行注釈書では、「橋の小島」は、宇治橋の下流にあるとされてきた。しかし、論考においては、宇治橋の上流に位置したという説がある。論考における「橋の小島」の位置は、二点の文献の記述に拠るものである。一つは、藤原明衡の『雲州消息』¹³⁾の記述である。藤原明衡は、『源氏物語』成立の時期に近く生きた人物である。

宇治院為「殿御領」之由承悦無極。(略)

傍置「盡屏之山」。前横「翠帶之河」。東望橋小島。西顧宇治長橋。

東に「橋小島」、西に「宇治長橋」と記されている。

二つ目は、『平家物語』「宇治川先陣」の場面、佐々木四郎高綱と梶原源大景季が出てきた場所「橋の小島が崎」の記述である。その記述は、「平等院の丑寅、橋の小島が崎より武者二騎ひっかく出てきたり。」(巻第九・宇治川先陣・一六六)¹⁴⁾である。「橋の小島が崎」は、「平等院の丑寅(北東)」であると述べている。この二つの文献の方位をそのまま採用すると、宇治橋の上流に「橋の小島」を置かざるをえなくなる。

しかし、『平家物語』の宇治川先陣争いの場面の「橋の小島」の

頭注は、日本古典文学大系『平家物語』⁽¹⁶⁾、新潮日本古典集成『平家物語』⁽¹⁷⁾、新編日本古典文学全集『平家物語』⁽¹⁸⁾に、ともに「宇治橋の下流にあった」と注記されている。『太平記』の宇治川先陣争いの場面は、日本古典文学大系『太平記』⁽¹⁹⁾の頭注に「宇治橋の川下二町にあった」、新潮日本古典集成『太平記』⁽²⁰⁾には、「宇治橋の下流、右岸に沿った地点にあった中洲。」であるとしている。いずれも、宇治橋の下流にあるとしている。

近世にはどう伝わっていただろうか。江戸時代寛文年間の『扶桑京華志』⁽²¹⁾卷之一に、

橋ノ小嶋カ崎 在^{橋南}平等院東^{長崎} 按スルニ源氏ノ辨引ニ曰在^{橋下}可^リ

二一町一乃河中ノ之嶋^{ナリ}也河水流ルニ于巨椋^{ヲウツ}然^モ而元和年間

鑿^レ河^ヲ塞^キ二旧流^ニ委^ス二于伏見^ニ河水倍徒^ス故没^ス二小島崎^ヲ

尚未^タ能^レ無^レ疑^ル按^ルニ源平盛衰記曰平等院ノ之小島崎^ト云々回

ハ^レ此^ニ則^ニ此ノ島在^ニ平等院側^ニ一必^セリ^ク矣

とあり、平等院の東、良の記述がありながらも、橋下流一町ばかりの河の中島で、その流れは巨椋池に流れていたと記す。また、『都名所圖會』⁽²²⁾卷五には、

橋小嶋崎は宇治橋の川下式町にありし也 平家物語に曰平等

院の良橋の小嶋が崎より武者二騎引かけく出来り

「橋の小島」は、宇治橋下流にあるとしているが、『平家物語』に言う、平等院の北東であった記事も伝えているのである。「橋の小島」

に関する論考では、『雲州消息』と『平家物語』の方位を参考として、「橋の小島」は、宇治橋上流であるとされているが、近世の地誌は『平家物語』の記述を紹介しながらも、宇治橋下流であるとしている。

三、穏やかな水面の描写——「橋の小島」付近——

では、『源氏物語』浮舟巻の「橋の小島」はどう描かれているだろうか。句宮と浮舟が舟で行く描写は、次のようである。

いとかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたまひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもらうたしと思す。有明の月澄みのぼりて、水の面も曇りなきに、「これなむ橋の小島」と申して、御舟しばしさとどめたるを見たまへば、大きやかなる岩のさまして、されたる常磐木の影しげれり。句宮「かれ見たまへ。いとかなげけれど、千年も経べき緑の深さを」とのたまひて、

句宮 年経ともかはらむものかたちばなの小島のさきに
契る心は

女も、めづらしからむ道のやうにおぼえて、

浮舟 たちばなの小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆ
くへ知られぬ

をりから、人のさまに、をかしくのみ、何ごとも思しなす。

(浮舟・⑥一五〇)^②

「橋の小島」付近は、「水の面も曇りなき」と表現されている。そこに「御舟しばしさしとどめ」て、歌を詠み鑑賞している。「橋の小島」は、古今集に詠われている。

今もかもさきにはふらむ橋のこしまのさきの山吹の花

(古今集巻二・春歌下・一二一・読人しらす)^②

「橋の小島」について、原田敦子氏は『源氏物語』に橋の小島が描かれたのは、この島が宇治の名立たる歌枕であったからではなかった」とされ、「祓所」だったと指摘されている。^⑤『河海抄』^⑥に「哥枕には河内国とあり如何但七瀬祓所には大嶋橋小嶋山城国と注せり」とあり、歌枕の地としては河内国か山城国か判然とせず、「橋の小島」が宇治であると歌において明示されるのは『後鳥羽院御集』なのである。

たちばなの小島が崎の月かけをながめやわたす宇治の橋守

(後鳥羽院御集・四六)^②

「橋の小島」は、人々の間で知られた場所だったのかもしれないが、歌枕として有名な地ではなかった。

『源氏物語』浮舟巻の場面、船頭に案内され「橋の小島」に舟を停めて、句宮と浮舟が歌を詠む。付近は、穏やかな水面に位置しているように描写されている。急流の中、二人が歌を詠むのを、船頭が流されるのをこらえながら待つという状況ではない。古今集をふ

まえ、穏やかな水面に橋の小島が位置しているというイメージで、紫式部は描いたのではないかと思われる。

ほかに、『源氏物語』総角巻に、宇治川での舟遊びの場面がある。

文作らせたまふべき心まうけに、博士などもさぶらひけり。

黄昏時に、御舟さし寄せて遊びつつ文作りたまふ。紅葉を薄く濃くかさして、海仙菜といふものを吹きて、おのおの心ゆきたる気色なるに、宮は、あふみの海の心地して、をちかた人の恨みいかにとのみ御心そらなり。時につけたる題出だして、うそぶき誦じあへり。

(総角・⑤二九三)

宇治川で舟遊びを催している。句宮は、琵琶湖にいるようだと感じていいる。

『増鏡』^⑧では、宝治二年(一二四八)十一月二十日頃、宇治川へ院の御幸があったことが綴られている。

殿上人の舟に楽器まうけたり。たち花の小島に御船さしとめて、物の音ども吹たてたるほど、水の底も耳たてぬべく、そゞろ寒き程なるに、折知り顔に空さへうちしぐれて、真木の山風あらましきに、木の葉どもの色く散りまがふ気色、いひ知らずおもしろし。

(第五・内野の雪・二〇三三)

「橋の小島」で停まり、管絃の遊びを催している。舟遊びの場として使われた場所であったのだろう。

このように、宇治川においての舟遊びの場は、穏やかな水面とし

て描写されている。

四、宇治川の急流―邸から見える川の流れ―

一方、浮舟の暮らす屋敷前の宇治川の風景は、どのようなものであったろうか。浮舟が、入水した時を回想する場面を挙げる。

ただ、我は限りとて身を投げし人ぞかし、いづくに來にたるにかとせめて思ひ出づれば、いとみじともの思ひ嘆きて、皆人の寝たりしに、妻戸を放ちて出でたりしに、風ははげし

う、川波も荒う聞こえしを、独りもの恐ろしかりしかば、來し方行く末もおぼえで、簀子の端に足をさし下ろしながら、行くべき方もまどはれて、帰り入らむも中空にて、心強く、この世に亡せなと思ひたちしを、
(手習・⑥二九五)

浮舟の屋敷前の宇治川から、川波の荒々しい音が聞こえてくる。「橋の小島」付近の表現と、目の前の宇治川の表現は異なっていることが分かる。他、急流としての宇治川の描写を挙げる。

この水の音の恐ろしげに響きて行くを、^{母君}「かからぬ流れもありかし。世に似ず荒ましき所に、年月を過ぐしたまふを、あはれと思しぬべきわざになむ」など、母君したり顔に言ひゐたり。昔よりこの川のはやく恐ろしきことを言ひて、^{女房}「先つころ、渡守が孫の童、棹さしはづして落ち入りはべりにける。すべていたづらになる人多かる水にはべり」と、人々も

言ひあへり。

(浮舟・⑥一六七)

宇治川の流れは速く恐ろしく、渡守の孫の子が、棹を外して落ちたと言う。亡くなる人が多い川であると言う。他にも、「いと荒ましき水の音、波の響き」(橋姫・⑤一三二)、「いと荒ましと思ふ川」(蜻蛉・⑥二二一)と表現されている。「橋の小島」付近と同じ川であるとは思われない状況である。

次に、『平家物語』巻九「宇治川先陣」における宇治川の描写を挙げる。

比は正月廿日あまりの事なれば、比良のたかね、志賀の山、昔ながらの雪もぎえ、白浪おびたしうみなぎりおち、灘枕おほきに滝なッて、さかまく水もはやりけり。夜はすでにほのゝとあけゆけど、河霧ふかく立ちこめて、馬の毛も鎧の毛もさだかならず。
(巻第九・宇治川先陣・一六五)

宇治橋の橋板をはずして京側の宇治橋に陣を取る木曾勢に対して、鎌倉の軍勢が宇治川をはさんで対峙し、宇治川を馬で渡る先陣争いの場面である。白浪が立ち、水流は速いと表現されている。「此河は近江の海水の末なれば、まつともまつとも水ひまじ。」(巻第九・宇治川先陣・一六六)とも述べている。琵琶湖の水が流れ出る川であるので、待っていても水量は減らないと言うのである。先陣争いの時期は、正月廿日あまりの頃、『源氏物語』浮舟巻の時期は、二月の十日のほどに、内裏に文作らせたまふ」(浮舟・⑥一四六)

の数日後のことであるから、時期としては一ヶ月ほどの違いはあるが、宇治川の景として参考になる。

佐々木太刀をぬき、馬の足にかかりける大綱どもをばふつくとうちきりうちきり、いけずきといふ世一の馬には乗ったりけり、宇治河はやしといへども、一文字にざつとわたいて、むかへの岸にうちあがる。梶原が乗ったりけるする墨は、河なかり籠のためが携形におしなされて、はるかの下よりうちあげたり。

(巻第九・宇治川先陣・一六七)

頼朝所有の第一の名馬いけずきに乗った佐々木四郎高綱は、宇治川を一直線に渡ったけれども、第二の馬、する墨に乗った梶原源太景季は、流れに押されて下流の対岸に着いている。屈強な鎌倉武士が渡る川のさまと、舟を少し停めつつ優雅に島を眺めながら進む川とは、同じ川の様相とは言えない。

このように、流れが速く荒々しい川、舟遊びをしながら優雅に行き交う穏やかな川、宇治川は二つの特徴を持つ川であったことが『源氏物語』の描写から窺えるのである。

五、「橋の小島」はどこか

では、「橋の小島」は、どこにあったと考えるべきだろうか。

宇治川について、『角川日本地名大辞典』⁽²⁴⁾に、「京都府南部を流れる川。(略)京都盆地に入ってから宇治川の流路は近世初期に大

きく変化しており、現在のように北西へ流れて伏見区の南側を西へ向かう流路は、文禄3年に豊臣秀吉の命によって前田利家が付け替えて以後のものである。それ以前は現在の宇治市槇島町・小倉町付近を幾条かに分かれて西へ流れ、巨椋池に流入していた。」⁽²⁵⁾とあり、宇治川の下流には、今は干拓された巨椋池があったことが分かる。宇治川下流の巨椋池は、二度の大きな変遷があったという。一つ目は、豊臣秀吉の太閤堤の築造、二つ目は明治四十年の淀川改修工事により池の水位が著しく低くなり自然美が失われ、昭和に入り干拓されたことである。太閤堤に関しては発掘調査結果が報告されている。⁽²⁶⁾

古代から太閤堤築造までの巨椋池の形状について、『巨椋池干拓誌』⁽²⁷⁾に、「現在の流路と巨椋池との間、すなわち槇島・向島地帯には幾多の島洲をつくり、その間に幾条にも分流となっていたもので、川であり湖であるという複雑な地形であった。」(一一八頁)と記されており、「橋小島ヶ崎」の位置が記されている(図2)。この図の示す「橋の小島」は、小さな島の先端部を指していると捉える。この川であり湖であるという部分に「橋の小島」があるのではないかと推測する。ここなら、浮舟が入水した宇治川、『平家物語』の先陣争いの宇治川とは、違う宇治川の様相になるのではと考えるからである。

『宇治市史年表』⁽²⁸⁾四四頁に「16世紀末、豊臣秀吉によって宇治川

の付け替えが行われた結果、それ以前の状況を正確に知ることが困難となった。右図は、微地形条件や史料からみて、できるだけ矛盾が少なくなるように考えてみたひとつの復元案である。」として、「律令時代の山城中央部」の復元案がある。また、『宇治市史1』には、巨椋池の範囲と現在の地形が重ねられた付図がある^{②③}。この付図に、のちの時代の絵図であるが、文化三年（一八〇六）に完成した『東海道分間延絵図』^④〔図3〕に、「此辺橋小島ヶ崎」との記述があり、その大まかな位置を示してみることとする〔図1〕。この位置は、宇治橋から約五百メートル下流である。近くに、『古事記』や『日本書紀』に登場し、『河海抄』の注記する菟道稚郎子皇子の墓がある。『承久記』^⑤の伝える承久三年の戦さにおいても、宇治橋合戦のあと、宇治川先陣争いがあった。川を渡る前に「瀬踏」して、川の様子を探っている。

武蔵守、芝田橋六を召て、「河を渡さんと思が、此間の水の程には一尺計も増りたるな。此下に渡る瀬やある。瀬踏して参れ」と宣ければ、「奉り候」とて、一町計打出たりけるが、取て返し、「検見を給り候ばや」と申。「尤さるべし」とて、南條七郎を召て被三指添。二騎連ねて下様に打けるが、槇嶋の二俣なる瀬を見渡けるに、あやしの下臍白髪なる翁一人出来れり。是を捕へて、「汝は此所の住人、案内者にてぞ有覽。何の程にか瀬のある。慥に申せ。勸賞申行ふべし。不申は、

しや首切んずるぞ」とて、太刀を抜懸て問ければ、此翁わな、きて、「瀬は爰は浅候ぞかし。彼は深候」と教へければ、「能申たり」とて、後には首を切てぞ捨にける。又人に言せじと
なり。
(一一〇頁)

槇島付近で、翁は「このあたりは浅く、あちらは深い」と述べている。「彼」は、軍勢が待機している宇治橋周辺であろうか。宇治川は、浅いところと深いところがあることが分かる。槇島付近は、浅くなっていることが分かる。

『源氏物語』における「橋の小島」が、宇治橋の下流に当たる巨椋池に注ぐ部分であるなら、流速も遅くなり水深も浅く、舟をしばし停めて鑑賞することができる。

なお、本論では、宇治橋の架橋位置を基準として、上流か下流という検討を行っているが、この架橋位置については、『宇治市史1』において「当時の宇治橋が現在の地点よりもやや上流部に架橋されていた可能性もある」^⑥とされ、定かではない。が、現在と違い、狭く深い川に短い橋を架けることはあっても、広く浅い川に長い橋を架けることは考えにくい。宇治橋の架橋位置に多少の地点の違いはあっても、宇治橋より上流は川幅の狭い急流であったことを示すものであり、下流側は水流が緩やかで浅く広い川であったことを示すと捉える。「橋の小島」の位置を、宇治橋の上流部とするか下流部とするかでは、川の様相が大きく異なってくるのである。

六、「橘の小島」までの距離

原田敦子氏は、「宇治川の兩岸に對置された八の宮の山莊と源氏の別莊、橘の小島はその中間に存在する川中島」^②とされている。川中島までどれくらいで到着するだろうか。

『源氏物語』本文から、宇治川をはさんで對岸の八の宮邸と夕霧の別莊は、音楽が聞こえて来るほどに近いことが確認される。匂宮が初瀬詣での帰途、宇治の夕霧の別莊に中宿りをし、薫や夕霧の息子たちが催した管絃の調べが、八の宮邸に聞こえてくる。

例の、かう世離れたる所は、水の音ももてはやして物の音澄みまざる心地して、かの聖の宮にも、たださし渡るほどなれば、追風に吹き来る響きを聞きたまふに昔のこと思し出でられて、^{八の宮}「笛のいとをかしうも吹きとほしたなるかな。誰ならん。昔の六条院の御笛の音聞きしは、いとをかしげに愛敬づきたる音にこそ吹きたまひしか。これは澄みのぼりて、ことごとしき氣のそひたるは、致仕の大臣の御族の笛の音にこそ似たなれ」など独りごちおはす。(椎本⑤・一七一)

對岸の夕霧の別莊から八の宮邸まで、薫が吹く笛の音が響いてくるほどの近い距離なのである。

現在の宇治川の平等院付近の川幅は、地形図で計測すると、およそ一五〇メートルあり、宇治神社側の川岸から橘島までおよそ百

メートルである。川の流速は、場所（川の中央部か両端かなど）や地形の深浅によって異なり、また、現在の宇治川の流れは計画的に施工され整備されているので、往時と同じとは言えない。しかし、仮に現在の塔の島付近の流速を採用し、平均流速一メートル/秒で、百メートル先の中島へ行くとすると、川を横断することになるので、明確ではないが二、三分ぐらいで到着するだろう。一方、宇治橋下流の約五百メートルの付近の菟道稚郎子皇子の墓辺りに行ったと試算すると、平等院から約九百メートルとなり、およそ十五分で到着することになる。『湖月抄』が記す宇治橋下一町だとすれば、平等院から約五二〇メートルとなり、約九分で到着する。九分ないし十五分程あれば、別の場所へ赴いたという感があるだろう。

結び

『源氏物語』浮舟巻の本文描写の考察によって、「橘の小島」は、穏やかな水面に位置することが分かった。少し舟を停めて匂宮と浮舟が鑑賞する。「橘の小島」は、穏やかな流れに位置しており、急流の中にはない。宇治川には、匂宮が「あふみの海の心地」^③（総角⑤・二九三）と感じる舟遊びの場があったのである。浮舟の邸から眺める宇治川と、「橘の小島」付近の宇治川は同様ではない。

現在目にする姿とは違い、宇治川は、かつて巨椋池に注ぎ、幾多の島洲を作り、湖とも川とも言えない複雑な地形を形成していた。

このような川の様相を『源氏物語』は、正確に描写しているものと思われる。流れが速く荒々しい川、舟遊びをしながら優雅に行き交う穏やかな川、二つの特徴を持つ川であったことを、『源氏物語』は本文で描き分けているのである。

「橋の小島」の位置に関する増田繁夫氏・原田敦子氏・所京子氏の論考では、『雲州消息』と『平家物語』の方位を参考にして「橋の小島」の位置を設定しているが、そうすると『源氏物語』の宇治川の水面を描写した本文と合わない。『雲州消息』『平家物語』の示す「橋の小島」の位置とは別の場所に、紫式部は「橋の小島」をイメージして描いたのではない。『源氏物語』の物語世界の中で「橋の小島」は、穏やかな水面に位置しているのであり、他史料に基づいての詮索は当てはまらない。『源氏物語』における「橋の小島」は、上流部および対岸までの中間の川中島に位置することはあり得ないのではないか。日本古典文学大系『源氏物語』に示されている「宇治橋の下流にある小島」説が妥当だろう。宇治橋下流に位置し、宇治川が巨椋池に流入し、流れが穏やかな場所が、『源氏物語』本文の描写に適していると考ええる。

注

- (1) 玉上琢彌氏編著『紫明抄・河海抄』(角川書店、一九六八年)。
- (2) 『北村季吟古註釋集成十七 源氏物語湖月鈔』新典社、一九七八年)。
- (3) 山岸徳平氏校注『日本古典文学大系 源氏物語五』(岩波書店、一九六三年)。
- (4) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈十二』(角川書店、一九六八年)。
- (5) 阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『日本古典文学全集 源氏物語⑥』(小学館、一九七六年)。
- (6) 石田穰二氏・清水好子氏校注『新潮日本古典集成 源氏物語八』(新潮社、一九八五年)。
- (7) 柳井滋氏・室伏信助氏ほか校注『新日本古典文学大系 源氏物語五』(岩波書店、一九九七年)。
- (8) 阿部秋生氏・秋山虔氏ほか校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語⑥』(小学館、一九九八年)。
- (9) 増田繁夫氏『源氏物語地理考―宇治・小野に関する古註の検討―』(甲南大学文学会、一九六〇年)。
- (10) 原田敦子氏『浮舟入水と橋の小島』(稲賀敬二氏編著『源氏物語の内と外』風間書房、一九八七年)。
- (11) 所京子氏『橋の小島の崎』の再検討』(『藝林』五七(二)、二〇〇八年)。
- (12) 社団法人紫式部顕彰会編、角田文衛氏監修『京都源氏物語地図』(思文閣出版、二〇〇七年)。
- (13) 川俣馨一氏編『新校羣書類第六卷』(内外書籍、一九三二年)。
- (14) 三保忠夫氏・三保サト子氏編著『雲州往来 享禄本 研究と総索引 本文・研究篇』(和泉書院、一九八二年)による。また、同書『補説一四』(七三頁)によれば、この書状は「後の増補になるものであろう。」とされている。前掲注(10)原田敦子氏『浮舟入水と橋の小島』においても、注記で示されている。

- (15) 『平家物語』本文の引用は、小学館『新編日本古典文学全集 平家物語二』による。巻名、頁数を示す。以下同じ。
- (16) 高木市之助氏・小澤正夫氏ほか校注『日本古典文学大系 平家物語下』(岩波書店、一九六〇年)。
- (17) 水原一氏校注『新潮日本古典集成 平家物語下』(新潮社、一九八一年)。
- (18) 注(15)に既出。
- (19) 後藤丹治氏・釜田喜三郎氏校注『日本古典文学大系 太平記二』(岩波書店、一九六一年)。
- (20) 山下宏明氏校注『新潮日本古典集成 太平記二』(新潮社、一九八〇年)。
- (21) 天理図書館所蔵『扶桑京華志』(請求番号 291.4/861)影印を用いた。『新修京都叢書第二巻』(臨川書店、一九七二年)において、翻刻されている。
- (22) 『新修京都叢書第六巻』(臨川書店、一九六七年)。
- (23) 『源氏物語』本文の引用は、注(8)に既出『新編日本古典文学全集 源氏物語①』(6)により、巻名、頁数を示す。私に傍線を付した。以下同じ。
- (24) 『新編国歌大観』CD-ROM版、Ver.2』(角川学芸出版、二〇〇三年)。
- (25) 注(10)に既出。
- (26) 注(1)に既出。
- (27) 寺島恒世氏著『和歌文学大系二四 後鳥羽院御集』(明治書院、一九九七年)。
- (28) 岩佐正氏・時枝誠記氏ほか校注『日本古典文学大系 神皇正統記・増鏡』(岩波書店、一九六五年)。巻名、頁数を示す。
- (29) 『角川日本地名大辞典 京都府上巻』(角川書店、一九八二年)。
- (30) 荒川史氏・永野宏樹氏「文化財レポート 宇治川太閤堤跡の発掘調査」『日本歴史』第七四五号、日本歴史学会、二〇一〇年)。
- (31) 『巨椋池干拓誌』(巨椋池土地改良区発行、一九六二年)。
- (32) 林家辰三郎氏ほか編『宇治市史年表』(宇治市役所、一九八三年)。

(33) 林家辰三郎氏・藤岡謙二郎氏編『宇治市史1古代の歴史と景観』付図(宇治市役所、一九七三年)。

(34) 東京国立博物館蔵『東海道分間延絵図』。児玉幸多氏監修『東海道分間延絵図(絵図篇)(解説篇)』(東京美術、一九八五年)も参考にした。

(35) 松林靖明氏校注『新撰日本古典文庫 承久記』(現代思潮社、一九七四年)。巻名、頁数を示す。

(36) 注(33)に既出。三八頁。

(37) 注(10)に既出。

(38) 淀川河川事務所「塔の島地区の河川整備について」(平成一九年十月一五日)。
www.yodogawa.kkr.mlit.go.jp/activity/cont/fou/report/pdf/08.pdf

〔図1〕国土地理院発行の二万五千分一地形図(宇治)を使用したものである。

〔図2〕『巨椋池干拓誌』(巨椋池土地改良区発行、一九六二年)一八五頁に掲載の「平安遷都以降豊公伏見築城頃までの巨椋池およびその沿岸図」を転載した。転載許可を下さった「巨椋池土地改良区」殿に感謝申し上げます。

〔図3〕「作品番号」E0036094
 「作家名」道中奉行所編
 「作品名」東海道分間延絵図13巻之内12本文7(部分)
 「所蔵先名」東京国立博物館

「クレジット表記」Image: TNM Image Archives

【付記】本稿は、平成二十六年年度広島大学国語国文学会研究集会(七月十二日)における口頭発表に基づき、題目を一部変更して作成したものです。御教示下さった先生方に、厚く御礼を申し上げます。

— かつう・のぶえ、広島大学大学院博士課程後期在学 —

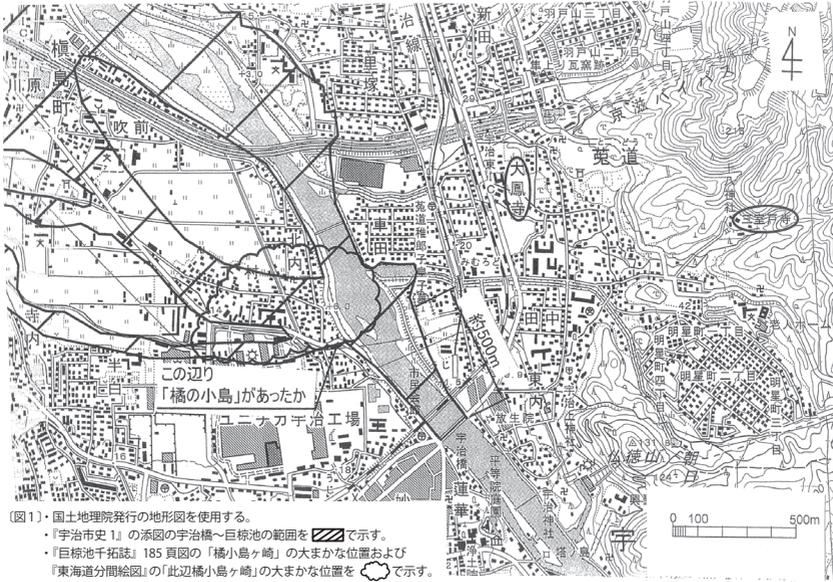


図1・国土地理院発行の地形図を使用する。
 ・『宇治市史』の添図の宇治橋～巨椋池の範囲を  で示す。
 ・『巨椋池千拓誌』185頁図の「橋小島ヶ崎」の大まかな位置および『東海道分間絵図』の「此辺橋小島ヶ崎」の大まかな位置を  で示す。

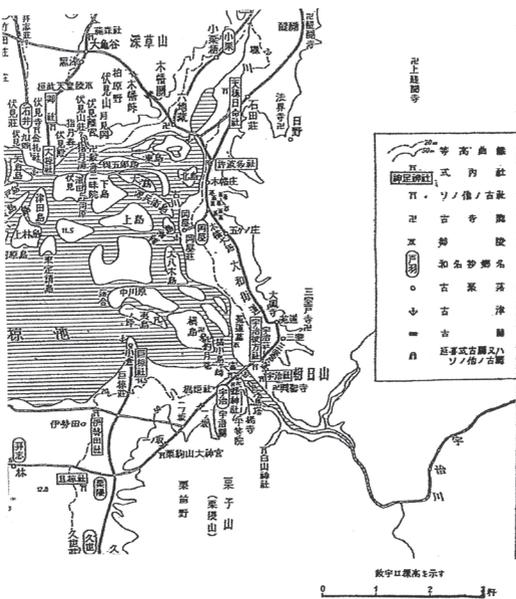
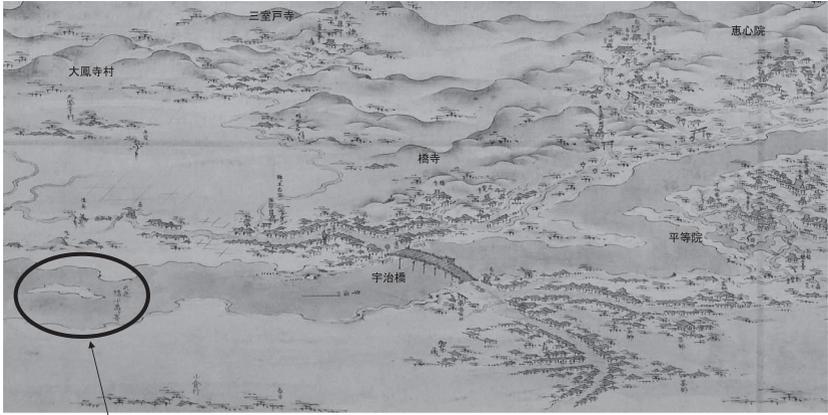


図2『巨椋池千拓誌』185頁に掲載の「平安遷都以降豊公伏見築城頃までの巨椋池およびその沿岸図」(筆者が、宇治橋周辺を拡大した。)



此辺橋小島ヶ着

〔図3〕『東海道分間延絵図』13巻之内12本文7（部分）
Image: TNM Image Archives
（見えやすいように地点名称を加筆した。）